

韓国朝鮮文化

◇教員◇

教授：福井玲、六反田豊、本田洋、アルバート・チャールズ・ミュラー

准教授：金成垣

特任准教授：李曉源

助教：岩井亮雄

◇学生◇

修士課程：9名、博士課程：20名

(1) 研究室の概要

韓国朝鮮文化研究室は、学部学生の定員をもたない大学院のみの独立専攻である。1993年4月に文学部附属文化交流研究施設に設置された朝鮮文化部門を母体として、2002年4月に開設された。日本では最初の韓国朝鮮文化に関する専門的な教育・研究組織である。

韓国朝鮮文化研究室は、文学部を離れて、赤門前の赤門総合研究棟の7階にある。文学部学生の利用にはいささか不便な位置だが、日本で最大規模の韓国朝鮮関係図書を所蔵しており、韓国朝鮮に関心をもつ諸君には宝庫のようなところである。本研究室は、前身が研究施設の一部門ということで、研究と国際交流が活動の中心となってきた。この間、意欲的な資料収集を続け、研究文献や史料の集積は短期間で日本有数のコレクションをもつに至った。とりわけ韓国の学術雑誌については、日本最大の所蔵を誇っている。日本における韓国朝鮮研究の中心として、共同研究や資料収集のために日本国内のみならず外国から訪れる研究者も多い。

朝鮮半島と日本列島という地理的に近接した2つの地域は、古代から現代に至るまで、政治・経済・社会・文化という、人間生活のさまざまな分野で深い交流を結んできた。日本列島で人々が作り出してきた歴史と文化が、朝鮮半島のそれと分かちがたく結びつき、今日もなお続いている。その重要性をいち早く認識したのが東京大学であり、すでに1916年、全国の大学にさきがけて文学部に朝鮮史講座を設置し、本格的な研究と教育を始めた。朝鮮文化研究室はその伝統のよき部分を受け継いでさらに発展させ、

韓国朝鮮文化研究専攻の開設へとつながった。韓国朝鮮文化研究専攻は、歴史学・考古学・社会学・思想史・科学史・言語学・文学・文化人類学など、多方面から韓国朝鮮の社会と文化を総合的に研究することを目的として開設され、韓国朝鮮歴史文化と韓国朝鮮言語社会の2つの専門分野で構成されている。

韓国朝鮮文化研究専攻は他研究室と異なり、所属する学部学生がいない。そのため学部学生諸君からはその姿が見えにくいことと思う。しかし、東洋史学、中国思想文化学、言語学、社会学など、専門的に関係の深い各専修課程と密接な協力関係をもって、韓国朝鮮文化に関する学部授業を担当している。講義と演習は関連各専修課程の必修科目に認定されており、文学部各専修課程に所属しながら韓国朝鮮文化研究室教員の指導を受けて卒業論文を書き上げ、韓国朝鮮研究者への道を歩む学生も多い。韓国朝鮮に関心をもつ学生であれば、専門に関係なく、訪れてほしい。研究室の扉は常に皆さんに向かって開かれている。

(2) 教員と授業

福井玲教授は、韓国朝鮮語の歴史言語学的研究、音声・音韻に関する研究、ハングル資料についての資料研究、韓国語の方言に関する研究を専門としている。より具体的には、15世紀を起点とする音韻史の研究や、日本と同様のピッチアクセントをもつ諸方言についての研究などのほか、本学部所蔵の小倉文庫において、雨森芳洲が編纂したと推定されながらも、これまでまったく研究されたことのない韓国語の近代語研究にとって重要な資料を見出して研究を進めている。また、ここ数年は小倉進平の残した朝鮮語方言調査資料をもとに、言語地図を作成し、その解釈を行なうことにより語彙史の研究も進めている。主な著書に『韓国語音韻史の探究』（三省堂2013年）、最近の論文に、「中村庄次郎筆写本『酉年工夫』の語学的特徴」（『韓国朝鮮文化研究』11、2012年）、「捷解新語初刊本のテキスト分析」（『韓国朝鮮文化研究』13、2014年）、「中世韓国語の「傍点」をめぐるいくつかの基本的な課題」（『言語研究』148、2015年）、「小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—」（『東京大学言語学論集』37、2016）などがある。

六反田豊教授は、中近世（高麗・朝鮮時代）史研究を専門としている。韓国精神文化研究院（現韓国学中央研究院）での留学経験をもち、韓国の

学界と太いパイプをもっている研究者である。最近の著書に『朝鮮史 1 先史～朝鮮王朝』（共著、山川出版社、2017年）、『韓国・朝鮮史への新たな視座—歴史・社会・言説』（共著、勉誠出版、2017年）、『朝鮮王朝の国家と財政』（単著、山川出版社、2012年）などがあり、また論文に「朝鮮時代の「武」と武臣」（『韓国朝鮮文化と社会』10、2011年）、「朝鮮前近代史研究と「海」—韓国学界の動向と「海洋史」を中心として」（『朝鮮史研究会論文集』51、2013年）、「興原倉小考—その所在地と移転問題—」（高倉洋彰編『東アジア古文化論攷』1、中国書店、2014年）などがある。近年では朝鮮半島における「水環境」の歴史学的研究に関心をもち、漢江流域の現地踏査も進めている。講義では朝鮮時代の税制や国家財政を扱い、演習では朝鮮時代史の基本史料である『朝鮮王朝実録』などを講読する。授業は東洋史学・日本史学・西洋史学・中国思想文化学の各専修課程で必修科目に認定されている。

本田洋教授は、社会・文化人類学を専門とし、主として韓国の地域社会を対象とする民族誌的研究に従事している。当初は韓国南西部南原地域の農村での長期の滞在調査に基づいて、産業化と都市化の過程における農村社会の変化を研究していたが、その後は歴史人類学的視角をも合わせ、多岐にわたる研究を行うようになった。近年では、都市から農村への移住者とコミュニティ形成を主題とした調査研究も行っている。主たる著書・論文に、『東アジアにおける文化の多中心性』（三尾裕子と共編、風響社、2001年）、『東アジアからの人類学：国家・開発・市民』（宇田川妙子・中村淳と共編、風響社、2006年）、「韓国の帰農：智異山麓山内地域の事例から」（『韓国朝鮮文化研究』2012年）、『有志と名望家：韓日地域社会構造に対する民族誌的比較』（韓国語、林慶澤と共著、イメジン、2013年）、『韓国農村社会の歴史民族誌：産業化過程でのフィールドワーク再考』（単著、風響社、2016年）等がある。文学部授業科目として、社会学概論・特殊講義・演習（社会学専修課程）、韓国朝鮮文化特殊講義・演習、文化人類学（ともに共通講義）を担当している。

アルバート・チャールズ・ミュラー教授は、思想学を専門としている。詳細は附属次世代人文学開発センターに記載されている。

金成垣准教授は、社会学を専門とし、失業・貧困問題や少子高齢化問題などの社会問題、そしてそれに対応するための雇用・社会保障政策や家族政策などの社会政策＝福祉国家政策について研究している。韓国や日本、

中国を中心としたアジア諸国・地域を主な対象とし、歴史比較分析を通じて今日の状況を明らかにし、国際比較分析を通じて各国の現状を明らかにすることを目指している。これをふまえ、今後の課題や展望を考える政策論についても関心を持っている。近年では、雇用不安定化や少子高齢化、多文化社会化といった社会変動とそこにおける福祉国家の変容をテーマとして研究を進めている。主たる著書に、『後発福祉国家論——比較のなかの韓国と東アジア』（単著、東京大学出版会、2008年）、『現代の比較福祉国家論——東アジア発の新しい理論構築に向けて』（単編著、ミネルヴァ書房、2010年）、『福祉国家の日韓比較——「後発国」における雇用保障・社会保障』（単著、明石書店、2016年）、『アジアにおける高齢者の生活保障——持続可能な福祉社会を求めて』（共編著、明石書店、2017年）等がある。文学部授業科目として、社会学概論・社会学演習（社会学専修課程）、韓国朝鮮文化特殊講義・演習（共通講義）を担当している。

李暁源特任准教授：韓国朝鮮文化研究室では、毎年1名ずつ外国人客員教授を招聘して、最先端の研究を紹介してもらっている。本年度の李暁源特任准教授は、韓国古典文学の専門家である。

（3）研究室事業

（1）コリア・コロキウム。毎年5回のペースで、原則として3番大教室で木曜日夕刻から開催しており、参加は自由である。変動する朝鮮半島の現在と過去を把握するために、内外の専門家に自由な立場から話してもらっている。韓国語・英語話者の場合は、日本語通訳もついている。

（2）韓国朝鮮研究文献コレクション。日本における韓国朝鮮研究関係文献センターとなることをめざして、各種史料・研究文献の収集と整理作業を行っている。基本史料や研究図書が中心となるが、韓国の学術雑誌、とりわけ大学・学会が出版したものの重点的整備を行っている。また、故末松保和学習院大学名誉教授の御遺族から同教授収集の朝鮮関係図書約3,000冊、韓国文化交流財団から語学関係学術新刊図書約1,000冊、韓国学中央研究院から同研究院発行図書など、多くの寄贈も受け入れ、韓国・米国など各国の大学・研究機関・学会と出版物の交換を行っている。

（3）国際交流。東京大学や人文社会系研究科を代表して、ソウル大学校（韓国）、イリノイ大学（米国）、高麗大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、成均館大学校（韓国）と交流協定を締結し、学術交流や学生交換を行って

いる。

(4) 外国人研究員。国際的な研究交流を行うために、日韓文化交流基金や国際交流基金の助成などを受けて、毎年各分野で数名の外国人研究員を迎えている。